

一本の道がありました。その道を旅する人は、だれもかれも死にました。へびに殺されたという人もあつたし、さそりだという人もありました。とにかくみんな死んだのでした。

あるとき、たいそう年とつた男が、その道を歩いていました。男はつかれて、石の上に腰を下ろしました。すると、とつぜん、目の前に大きなさそりがあらわれました。さそりは、見るまにへびに変わって、はって行ってしまいました。男はびっくりして、ほんとうは何なのか知ろうと考えて、少しあとからついて行きました。

へびは、昼も夜も、あちこちはって行き、そのあとを、男は影のようについて行きました。

へびは、あるときは宿屋に入って行き、旅人を殺しました。またあるときは宮殿に入って行って、王さまを殺しました。お妃の部屋で末の王女を殺しました。へびがはって行く所では、どこでもすすり泣きや嘆く声が聞かれました。

あるとき、道は、広く深い川にぶつかりました。川岸には、渡し船にはらうお金のない貧しい旅人たちがすわっていました。とつぜん、へびは、首輪と鈴をつけたりっぱな水牛に変わって岸に立ちました。旅人たちは、

「あの水牛は、川を渡って帰るところにちがいない。あれに乗って、むこう岸に渡ろう」といいました。そして、水牛の背中によじのぼったり、しっぽにつかまったりしました。

水牛は、川に入って、泳ぎ始めました。川の一番深い所まで来たとき、水牛は、いきなりあばれ出しました。旅人たちは、みんなふり落とされて、おぼれてしまいました。

男は、船に乗って川を渡りました。むこう岸に着いたとき、水牛が水からあがって、りっぱな牡牛に変わるのを見えました。そこへひとりの百姓がやって来て、牡牛をだまして家に連れて帰りました。男は影のように行って行きました。

百姓は、牡牛を他の牛たちといっしょにつないでおきました。夜中に、牡牛はへびに変わり、他の牛や羊にかみついてころしました。へびは、百姓や眠っているその家族もころして、出て行きました。男は、また影のように行って行きました。

やがて、別の川の川岸まで来ると、へびは宝石をいっぱい身につけた美しい女に変わりました。そこへ、ふたりの兄弟がやって来ました。女はふたりを見ると、激しく泣きだしました。兄弟は、

「どうしたのですか。どうしてこんな所にひとりでいるのですか」とたずねました。女は、

「渡し船を待っているあいだに、夫が川に落ちておぼれてしまったのです。わたしはひとりぼっちになりました」と答えました。すると、兄のほうは、

「心配することはありません。わたしといっしょに暮らしましょう」といいました。女は、

「わたしと結婚したいのなら、条件があります。わたしに家の仕事をやらせないこと。

それから、わたしの求めるものを何でもくれることです」といいました。

「分かりました。何でもあなたのいうとおりになります」

兄がいうと、女は、

「では、まず井戸へ行つて水を一杯くんで来てくださいな」といいました。

兄が行つてしまうと、女は弟に向かっていいました。

「さあ、兄さんがもどつてこないうちに、逃げましょう。わたしはあなたを愛しているのですよ」

弟はおどろいて、

「いや、いや。あなたは、兄さんの妻になると約束したじゃありませんか」といいました。すると、女はかんかん腹を立てました。そして、兄が井戸からもどつてくると、泣いてさげびました。

「あなたの弟は悪い人ですね。あなたを置き去りにして、わたしをさらつて逃げようとしたんです」

弟がひとこともいえないうちに、兄は刀をぬいて弟に切りかかりました。兄弟は激しく戦つて、ふたりとも死んでしまいました。

女は、へびのすがたになりました。男は、また影のようについて行きました。

やがて、へびは、白いひげの老人になりました。男は、勇気を奮い起こして、老人にたずねました。

「あなたは何者のですか」

白いひげの老人は、ほほ笑んで答えました。

「人びとは、わたしを死神とよんでいます。なぜなら、わたしは、世界に死をよびよせながら、この道を歩いているからです」

男は、

「わたしは、何日もあなたの後をつけて来ました。そして、わたしは、この世がいやになりました。どうか、わたしに死をあたえてください」とたのみました。老人は、首をふつていいました。

「いや、いや。まだです。寿命がきた人にだけ死を贈るのです。あなたは、この先まだ六十年あります」

そういつて、白いひげの老人は消えました。

老人は、ほんとうに死神だったのでしようか。それとも悪魔だったのでしようか。それはだれにも分かりません。

原話：『インドの民話』ラーマーヌジャン編／中島健訳／青土社

再話：村上郁